論文内容の要旨

氏　名	劉　巍
論文題目	あだ名についての日中比較研究 ―言語・文化を中心に―

要　旨

日常生活や文学作品中において、外貌・性格・しぐさなど人の特徴に基づいてあだ名（外号）をつけることはよくあることである。日中両国は認知的・文化的な面において類似性もあるが差異が存在することもあることから、あだ名（外号）にも言語的類似性と独自性がある。本論文では、日中のあだ名（外号）について認知的・文化的な観点から比較研究を行った。また、あだ名（外号）が原因で起こる社会問題についても探った。

本論文は、以下の７章から構成される。

第１章では、本研究の背景を述べた。あだ名（外号）は、我々が日常行う名づけ行為の典型的なものである。学生から社会人、有名人から身近にいる人々までたくさんの人があだ名（外号）を持っている。あだ名（外号）は日常的な呼称の一つとして、「本名より覚えやすい」「距離感を縮め、人と親密感を増す」などのメリットが多くの人に認められている。その他、あだ名（外号）は人物の個性を際立たせるため、文学作品でも活躍している。一方で、欠点や弱点に基づいてあだ名（外号）をつける時もある。そのため、一部のあだ名（外号）は嘲笑・皮肉・罵声などの侮辱的な面が存在する。近年ではあだ名といじめ問題が関連付けられるようになった。

第２章では、先行研究について考察を行った。従来の研究では、日中両国それぞれあだ名（外号）に関する研究が心理学・社会学・言語学などの領域からなされているが、認知的・文化的観点からは日中両国のあだ名（外号）についての比較研究はほとんどない。例えば、大野木（2018）の中で、「身体的欠陥を指摘したりするあだ名の使用は差別的で不適切である」と論じられている。日本社会では確かに身体的欠陥に基づいてあだ名（外号）をつけることはあまり多くないが、中国ではよくある。そのため、その差異を引き起こした原因はどこにあるのか、研究する必要がある。

第３章では、あだ名（外号）の定義から分析した。『日本国語大辞典』では、「あだ名」について「本名とは別に他人を親しんで、また、あざける気持ちから、その容姿、性質、くせ、挙動などの特徴によって付けた名である。」と解釈されている。中国の『現代漢語詞典』では、あだ名（外号）について「人的本名以外，别人根据他的特征给他另起的名字，大都含有亲昵、憎恶或开玩笑的意味。」と解釈されている。あだ名（外号）の定義の中において、日本では「親しむ」と「あざける」という２点が提示されているが、中国においては「憎悪」を加えた３点が提示されている。本論文はあだ名（外号）にニックネームも含む。

第４章では、日中両国のあだ名（外号）のつけ方を考察した上で、以下の 13 種に分類した。①見た目からつけられたあだ名（外号）②性格からつけられたあだ名（外号）③しぐさの特徴からつけられたあだ名（外号）④好み・優れた点からつけられたあだ名（外号）⑤本名から変形したあだ名（外号）⑥雰囲気からつけられたあだ名（外号）⑦身につける物・持ち物からつけられたあだ名（外号）⑧職業・家業・身分・環境・役割からつけられたあだ名（外号）⑨出来事からつけられたあだ名（外号）⑩失言・口癖・独特の口調・話題からつけられたあだ名（外号）⑪年齢・生年・性別・出身地からつけられたあだ名（外号）⑫歴史上の人物や典故からつけられたあだ名（外号）⑬親族・長幼関係があるためつけられたあだ名（外号）

⑫と⑬の分類は中国特有のものである。①から⑪の分類は日中両国で一致しているが、あだ名のつけ方に言語的・文化的共通点と相違点が存在している。あだ名（外号）の中には、見た目・性格・しぐさによってつけられたものが最も多いため、この三種類について具体例を列挙しよう。

① 見た目からつけられたあだ名（外号）

日中両国ともに「電信柱（电线杆子）」「マッチ棒（火柴）」「もやし（豆芽）」は痩せた人のメタファーで、人のあだ名（外号）として使われている。これらは痩せていることを表す以外にも、「電信柱（电线杆子）」は背が高いこと、「マッチ棒（火柴）」は背が低いこと、「もやし（豆芽）」は体が弱いという意味が含まれている。

しかし、痩せた人を表すあだ名（外号）には日中で異なるメタファー表現もある。日本語の「ごぼう」と中国語の「麺条」である。この違いは主に食文化の違いに影響を受けているようである。日本人はごぼうを好み、おかずやスープやサラダなど様々な方法で食べているが、中国でごぼうは主に薬として用いられており、日常生活ではあまり見かけない。麺類は中国人、特に北方地域の人々の主食の一つとして認知されている。また、中国では、生活に密着した道具である「竹竿」を痩せた人のメタファーとすることがある。

② 性格からつけられたあだ名（外号）

両言語とも「頭」を参照点とした「身体部位と全体」の近接関係、メトニミー表現で、頑固な人を表すあだ名（外号）は、日本では「缶詰」、中国では「榆木脑袋」が使われている。「缶詰」と「榆木」の硬い特徴をメタファーとして表したものである。鉄製の缶詰は日常生活でよく見かけられ、酒のつまみや非常時の食べ物として使われていて、材質が非常に硬いことから、頭が固く頑固な人につけるあだ名（外号）のようである。イージーオープンエンドのついていない缶は道具を使用しなければならず、頑固で他人の意見を受け入れられない人を比喩している。また、長期間保存でき中身が腐敗変質しないという特徴も、人の考えが変わりにくい様子が推測できる。中国では、頑固な人を表すあだ名（外号）に「榆木脑袋」を用いている。榆木（楡：ニレ）は硬い材質という特徴から、良い家具の材料として使われている。

また、中国では、数量表現を使って頑固な人を「一根筋」と表現する。これは考えが一つしかないことを喩え、貶す意味を持つ。中国語の「一根筋」は日本語に訳すと「一本筋」になるが、「一本筋」は称賛の意味があり、信念に揺らぎがないことを表すようである。

③ しぐさの特徴からつけられたあだ名（外号）

おしゃべりな人のメタファーとして、日本語には「放送局」、中国語には「大喇叭（ラッパ）」というあだ名（外号）がある。両者を比較すると、日本語の「放送局」は情報の収集と伝達の二つの過程であり、中国語の「大喇叭」は主に情報の伝達過程を強調しているようである。また、日本語の「放送局」は一般的に聞いた情報をそのまま他人に話す人を表し、中国語の「大喇叭」は他人から聞いた情報にさらにあることないことを付け加え、誇張して他人に話す人を表している。大きな音が出るという「大喇叭」の特徴は、中国人の大きな声で話す習慣とにぎやかな環境を好む性質にも合っているようである。

中国の独特な文化背景における特有のあだ名（外号）には、歴史上の人物や典故から「小漢卿」「猛張飛」「小諸葛」「二諸葛」「賽諸葛」などがある。このようなあだ名（外号）は中国人の古人崇拝という思想と関係がある。また、祠堂の順位や親族に対する複雑な呼び名からも、中国は昔から長幼の序を重視していることが分かる。例えば、家族が三人そろって「老糖餅」「糖餅」「小糖餅」と呼ばれたり、親子三人が「大積極」「二積極」「三積極」と呼ばれたりする。また、「老不死（死に損ない老いぼれ）」「老東西（老いぼれ）」「小東西（チビ餓鬼）」「这孫子（こいつ）」「那孫子（あいつ）」などと呼ぶことがある。

第５章では、範囲を狭め、角度を変えて動物のイメージに基づいてつけられたあだ名（外号）を考察し、日中動物の特徴（馬・驢馬・タコ・ガチョウ・鶴・キリン・狼・猿・牛・虫・鶏・鴨）と人のあだ名（外号）との関係を明らかにした。中でも代表的な動物である日本の狸と中国の狐、虎及び犬を通して、あだ名（外号）として使う時の共通点と相違点を分析した。

化けて人間を騙そうとする、また裏表がある人について、日本の場合は「狸」「狸みたいな人」「狸親父」というあだ名を使うが、中国の場合は「狐狸（キツネ）」「老狐狸（ラオキツネ）」と呼んでいる。しかし、日本の「狸」のどこか間が抜けているユーモラスなイメージとは異なり、中国の「狐狸」は悪巧みや狡猾さから、日本の「狸」よりさらに貶す意味合いが強い。「狐狸」は中国では妖艶・誘惑・淫売・気まぐれなどのイメージがあり、よく女性に対して「騒狐狸」「狐狸精」というあだ名（外号）をつける。『聊斎志异』には、若く美しく、誘惑して男の魂まで抜き取るたくさんの狐狸精の姿が描かれている。九尾の狐が化けた妲己は自分の美貌を利用して殷の紂王を惑わし、国を滅ぼしたという伝説もある。妖艶な美貌は「狐狸精」の最大の特徴だと言える。一方、日本語には「女狐」という言葉があるが、「美しくて男を誘惑する」よりもむしろ「女のずる賢さ」を強調しているようである。

逞しい体や勇猛な姿などの特徴は虎に喩えられ、日本の武将や中国の英雄などによく使われる。例えば、戦国大名武田信玄のあだ名「甲斐の虎」や『水滸伝』に登場した豪傑のあだ名「锦毛虎」などがある。本当は弱いのに虚勢を張っている人を表す時にも、日中両国とも虎に因んで「張り子の虎」「紙老虎」と呼ぶ。ただ、日本の「張り子の虎」は、主体性がなく人の言うことにただ頷いている人や、首を動かす癖がある人を指すこともある。また、同様に独特な日本文化の影響を受けた、ひどく酒に酔った人を表す「大虎」という言葉もある。一方、中国においては、怒りやすく凶悪な人を表す「老虎」というあだ名（外号）がある。女の場合は、「母老虎」というあだ名（外号）がよく使われる。内面は虎のように凶悪だが表面が優しそうに見える人を「笑面虎」、勇敢で大胆であるが無鉄砲に行動する人を「虎子」「虎妞」と呼ぶなど、男女によって使い分けられる。

犬をあだ名に付ける場合、日本ではプラスのイメージが多いが、中国ではマイナスのイメージが多い。日本では醜い見た目を表す「ブルドック」「チンクシャ」、足が短い「ダックスフンド」以外は、ほぼ可愛らしさや明るい性格を表すあだ名（外号）である。人間と犬の親密関係に基づき「ワンワン宰相」「犬博士」などもある。一方、中国文化では犬は奴隷根性がある動物だと思われ、「哈叭狗（ペコペコする人）」「走狗（手先）」「狗腿子（何でもやれる、 駆り立てられる卑しいやつ）」などのあだ名（外号）がよく使われている。卑劣で恥知らずな人を「癞皮狗」、家柄や身分が卑しい人を「红眼狗（目が赤い奴）」「机灵狗（身分が低くずる賢い人）」「花脖狗（首にあざがある奴）」と呼ぶあだ名（外号）もある。

第６章では、他人を侮って自分の優越感を増すためにつけたあだ名が存在することにより、いじめのような社会問題につながることを提示している。近年、日本においても中国においてもあだ名（外号）を禁止するという訴え掛けが増えてきたが、日本と比べると中国ではあだ名（外号）によって起きたいじめ問題についての関心度は低いようである。その原因を以下の４点に指摘した。①中国においては、昔から子供に「黑臀（黒いお尻）」「狗剩（犬が食べ残した食べ物）」「驢糞（ロバの糞）」などのあだ名（外号）、賤名をつけ、健やかな成長を願う風俗習慣があるため、汚い言葉を使って名をつけることはある程度受け入れられる。②古代から近現代の文学作品において、あだ名（外号）は中国文学の一つの大きな特色だと言える。あだ名（外号）が文学作品で活躍し推賞されることは、現実社会での使用を助長する。③中国人には生まれつきのユーモア感覚があるという民族的性格とも関係があるようである。そのため、中国人はあだ名（外号）に対して寛容である。かなり悪い意味を含むあだ名（外号）がつけられたとしても、冗談と解釈して気にしない人が少なくない。④中国では日本と比べて他人がどう思うかを気にするよりも自分の事や自身の感覚を大事にする気持ちの方が強いようである。憎悪の感情を込めた悪いあだ名（外号）をつけられても気にしない中国人は少なくない。

第７章では、本研究の不足点と今後の展望について論じた。今回はあだ名（外号）に対して共時的な研究を行った。今後は通時的な研究を行い、異なる時代におけるあだ名（外号）の相違点・共通点と変化を探究したいと思う。なお、今回は主に動物のイメージに基づいてつけられたあだ名（外号）を研究したが、他のあだ名（外号）も数え切れないほど存在する。今後は食べ物や植物などのイメージに関わるあだ名（外号）を研究したいと思う。

論文審査の結果の要旨

氏　名	劉　巍
論文題目	あだ名についての日中比較研究 ―言語・文化を中心に―

要　旨

本論文は、言語文化の視点からのあだ名についての日中比較研究である。

従来、日中両国それぞれにおいては、あだ名（外号）に関する研究が心理学・社会学・言語学などの領域からなされている。しかし、認知的・文化的観点からの両国のあだ名（外号）の比較研究はほとんどない。例えば、日本社会では確かに身体的欠陥に基づいてあだ名（外号）をつけることはあまり多くない。しかしながら、中国ではよくあり、日中両国間において差異が存在している。その差異の原因はどこにあるのか、研究する必要がある。本研究は、日中両国のあだ名（外号）を比較研究する上で両言語に反映される認知的・文化的類似性と独自性を分析している点に、独創性が認められる。

本論文において評価すべき点をいくつかあげておきたい。

第一に、本論文は日中あだ名（外号）の定義から分析している。『日本国語大辞典』では、「あだ名」について「本名とは別に他人を親しんで、また、あざける気持ちから、その容姿、性質、くせ、挙動などの特徴によって付けた名である。」と解釈されている。中国の『現代漢語詞典』では、「人的本名以外，別人根据他的特征给他另起的名字，大都含有亲昵、憎恶或开玩笑的意味。」と解釈されている。日本では、「親しむ」「あざける」という２点が提示されているが、中国においては「憎悪」も含めた３点が提示されている。このことから、日中両国におけるあだ名（外号）の定義には大きな差異が存在していることを明確に指摘した。

第二に、先行研究ではあだ名（外号）には多種の分類方法があるが、本論文では日中両国のあだ名（外号）のつけ方を詳しく考察した上で、言語文化の特徴に基づいて 13 種に分類している。特に、中国の独特な文化背景における特有のつけ方（人物や典故からつけられたあだ名、親族・長幼関係があるためつけられたあだ名）を提示している点に独創性が認められる。そのつけ方が存在している理由としては、中国人の古人崇拝や長幼の序の重視などの思想と関係があるとも指摘した。

また、日中両国で一致している分類（見た目・性格・しぐさなどの 11 種）には、認知言語学と文化的な視点から、具体例を列挙しながらその共通点と相違点を分析した。

第三に、本論文は動物のイメージに基づいてつけられたあだ名（外号）を考察し、日中動物の特徴と人のあだ名（外号）との関係を明らかにしている。中でも代表的な動物である日本の狸と中国の狐、虎及び犬を通して、あだ名（外号）として使う時の共通点と相違点を明らかにした。

第四に、日中両国において、あざけりの感情を持ち他人を侮って自分の優越感を増すためにつけたあだ名（外号）が存在していることについて述べている。あだ名（外号）はいじめのような社会問題につながることを論じ、近年、日本においても中国においてもあだ名を禁止するという訴え掛けが増えてきたが、日本と比べると中国ではあだ名によって起きたいじめ問題について許容範囲が広くて関心度は低いようだと分析している。その原因として、①中国においては、昔から子供にあだ名（外号）、賤名をつけ、健やかな成長を願う風俗習慣があるため、汚らしい言葉を使って名をつけることは、ある程度受け入れられる。②古代から近現代の文学作品において、あだ名（外号）は中国文学の一つの大きな特色だと言える。あだ名（外号）が文学作品で活躍し推賞されることで、現実社会での使用を助長する。③中国人には生まれつきのユーモア感覚があるという民族的性格とも関係があるようである。そのため、中国人はあだ名（外号）に対して寛容である。かなり悪い意味を含むあだ名（外号）がつけられたとしても、冗談と解釈して気にしない人が少なくない。④中国では日本と比べて他人がどう思うかを気にするよりも自分の事や自身の感覚を大事にする気持ちの方が強いようである。憎悪の感情を込めた悪いあだ名（外号）をつけられても気にしない中国人は少なくないという四つの面から結論づけた。

本論文は日中両国のあだ名（外号）についての共時的な研究であり、今後は通時的な研究を行い、異なる時代におけるあだ名（外号）の相違点・共通点と変化を探究することが課題となる。また、今回あまり研究されなかった食べ物や植物などのイメージに関わるあだ名（外号）の研究も課題である。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	靳　衛衛
副査	教授	柿木　重宜
副査	教授	益岡　隆志

最終審査の結果の要旨

氏　名	劉　巍
試験科目	
判　定	合　格　・　不　合　格

要　旨
学位申請者の研究成果および学力を確認し、審査するために、博士論文を中心に公開口述試験を実施した。(2021年1月28日) 申請者の本博士論文の内容に対する説明は、要領を得たものであり、本論文を当該研究分野の中に位置づけ、得られたその成果と残されている問題点や弱点についても、的確に把握しているものであった。申請者は、本博士論文に対して的確で客観的な自己評価を有している、と判断された。審査委員の質問・指摘にも、的確に答えることができた。その応答は、十分満足のいくものであった。それに加えて、申請者と審査委員とのやりとりから、本博士論文が、さらに発展していく可能性を有したものであることが確認できた。さらに、本論文では直接取り上げていない関連領域に対する質問にも的確に答えた。また、審査委員とのやりとりから、申請者が日中対照言語学、認知言語学、日中比較文化学に関する知識・学力を十分有していることが確認できた。 申請者の外国語の試験については、日本語によって執筆された学位論文と中国語・英語・日本語における要約における表現力の高さ・正確さから判断し、試験を免除した。 以上の諸点を総合し慎重に判断した結果、論文審査委員会は、全員一致で、本博士論文に対する博士（言語文化）の学位授与を適格と認め、合格と判断した。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	靳　衛衛　印
副査	教授	柿木　重宜
副査	教授	益岡　隆志